



二 大王公園に行く

「おっ、あそこが公園か」

大王がポケットから身を持ち出して嬉しそうな声を上げた。家の近所の中央公園だ。僕たち子どもたちにとっての遊び場だ。キャッチボールをしたり、サッカーボールを蹴りあったり、ドッジボールを投げあったり、バスケットボールをゴールに入れ合ったり、鬼ごっこをしたりしている。僕らの遊びのディズニーランドであり、ユニバーサル・スタジオだ。しかも、入場券はいらない。無料だ。それに、遊びは自分たちで考える。無限大だ。

「ほう、それはいいな」大王の顔が笑みで一杯になる。

「どんどん遊んで、どんどん体を動かせば、どんどんお腹が減るし、どんどん食べられる。わたしたちの仕事はどんどん忙しくなるが、主がどんどん成長するためには、どんどんと食べた方がいいんだ」大きく首を何度も縦に振る大王。

「わかったよ」大王はどんどんが大好きらしい。僕も大きく首を縦に振った。そして、どんどんと公園の中を歩いた。

朝が早いせいか、公園には子どもたちはいない。代わりに、おじいさんやおばあさんたちが集まっている。何をしているんだろう。音楽が聴こえてきた。ラジオ体操だ。おじいさんたちが手や足を動かし始めた。ラジオ体操は学校以外、公園では夏休みにしかしたことがない。今でもやっているんだ。

「ラジオ体操はいいぞ。お腹も減るし、便通もよくなる。わしにも毎日会えるぞ」大王がうん、うんと自分で納得している。毎日、トイレに行くのはいいことだけど、毎日、大王に会って、お説教は受けたくはない。

公園を過ぎ、池にやって来た。この地域は、雨が降らないため、あちらこちらにため池がある。そのため池の土手を利用して、散歩やジョギングをしている人は多い。

「おっ。いい風だな」池の上の空気と土手の上の空気に温度差があるため、空気が移動する。それが、風だ。

「たまには、こんな空気も吸ってくれよ。お腹の中は、食べ物匂いなんかで、空気が淀んでいるんだ。新鮮な空気だけでも十分美味しいんだ」大王が腕を広げて、ここぞとばかりに深呼吸を繰り返している。

そんなものかな。自分のお腹の中には行ったことがないから、大王の言うことを信じるしかない。でも、部屋にこもっていて、家の外に出ると、気分が爽やかになる。僕も大王を真似して大きく息を吸い込んだ。確かに空気が美味しい。甘くもなく、辛くもない。でも、新鮮だ。

「そうだ。そうだ。それでいいんだ」大王が頷いている。

「近所も一回りしたな。さあ、家に帰って、朝食を食べよう。腹が減ったぞ」

僕のお腹のことなのに、大王は、まるで自分のことのように言う。公園の時計を見た。午前七時だ。パパやママは、まだ、起きていないだろう。

「起きてなかったら。起こせばいいんだ。折角の休みだぞ。有効に使わないと損するぞ」

大王にとっては久しぶり？の外の世界だから、張り切るのはわかるけれど、パパやママは、平日

、仕事で忙しいので、折角の休みの日くらいはゆっくと寝坊したいのだろう。人によって、折角は異なるんだ。

「さあ、帰ろう。帰ろう」大王が僕の服を掴んで急がす。大王は、早く朝食を食べたいみたいだけど、今から帰れば、好きなアニメの番組の放送が始まる。それを観てからでいいだろう。

僕は家に帰ると、テレビを点けた。やってる、やってる。アニメの番組が始まっていた。ちょうど、主題歌が終わろうとしているところだった。

「なんだ、それは」大王が胸ポケットから顔を出した。

「そう言えば、日曜日の朝は、目ざまし時計の代わりに大きな音が聞こえてきて、目が覚めるんだ。それは、その音だったのか」

「お腹の中なのに、音が聞こえるの？」僕が不思議そうに尋ねた。

「もちろんだ。人間の耳や鼻、口、喉、食道、胃、小腸、大腸までは穴の空いたホースみたいなものだ。小さな音は聞こえないけれど、大きな音ならちゃんと聞こえているぞ。特に、悪口はな」大王はにやっとして僕の顔を見つめる。

「ふーん。そうなんだ」別に聞かれて悪いことは言っていないつもりだ。でも、大王たちに聞かれているとは思わなかった。都合が悪い時は、口をふさいでおこう。でも、それじゃあ、しゃべれないか。

僕は、テレビを観続ける。画面には正義のヒーローがやってきて、悪い奴らをやっつける。最初は、ヒーローが優勢だが、途中から、悪い奴らが正義のヒーローを追いつめる。危ない。もう駄目だ。僕は手を握り締める。汗がにじむ。その時、ヒーローが必殺技を繰り出した。悪い奴らは倒れた。勝った。毎回、同じパターンだ。だけど、悪い奴らが、あの手この手でヒーローを倒そうとして、ヒーローは苦戦するけれど、最後には勝つ。それで、僕も勝った気になる。

「なんだ。そんなものを観ていたのか」大王も僕と同じようにテレビを観ていたらしい。

「そんな作り話よりも、本当の話の方がいいだろう。わしが話を聞かせてやる」大王が自慢そうな顔をして僕を見つめる。

「どんな話？」大王の言葉につい反応した。好きなテレビ番組は終わったし、パパやママもまだ起きそうにない。それで、僕は大王の話聞くことにした。